

〈書評〉

Robin M. LeBlanc著

*The Art of the Gut:**Manhood, Power, and Ethics in Japanese Politics*

(University of California Press 2010年 256頁 ISBN-13: 978-0520259164 US\$60.00)

申 琪榮



現代日本において政治が男性の領域と見なされてきたことは疑問の余地がない。日本の政治領域では依然として女性の参加が極めて少なく、「女性の視点」が国の重要政策の根拠になることもほとんど想像しがたい。政治の男性性はもはや疑問を呈する対象にもならず、当然視されている。このため政治と男性性の関係は、政治学者はいうまでもなく、ジェンダー研究者による本格的な取り組みも少ない。ジェンダー研究の領域では、政治の男性性を前提とし、男性の独占領域と見られる政治の場に進出した「珍しい」女性達——主に、女性議員——にもっぱら研究関心が寄せられてきた。

しかし、アメリカの政治学者ロービン・ルブランの著書*The Art of the Gut: Manhood, Power, and Ethics in Japanese Politics*（腹芸を意味する著者の訳語である。164頁参照）は、政治と男性性の関係は政治権力を理解するために不可欠であるという常識をあらためて認識させる。約10年前出版された初の単書*Bicycle Citizens: The Political World of Japanese Housewife*（University of California Press, 1999）が、生活クラブの政治組織である「生活者ネットワーク（略称：ネット）」で活躍する主婦達の政治的エージェンシーに注目したとすれば、本書は、日本政治の主役たる男性たちに目を向け、著者のいう「男性性パズル」（manhood puzzles）（xviii頁）を解くことを目的とした新たな試みである。政治のジェンダー化メカニズムを解明するためには、権力の周辺に置かれる女性たちの研究も必要不可欠であろうが、それ以上に、政治にふさわしいジェンダーとみなされる男性性の役割を明らかにする必要があるためである。政治と男性性の関係を明らかにすることは、女性の政治参加を妨げる要因を政治の内部から解明するという意義も持つことになる。

しかし、著者は政治におけるジェンダー・ダイナミクスを単純に男女の対立的な位置づけとして——男性であるがゆえに有利、または女性であるがゆえに不利というような——考察しているわけではない。本書はむしろ、ローカルな政治領域で働く複数の男性性の実態をエスノグラフィとして描き出すことにより、男性市民のほとんどは、日本社会のヘゲモニックな男性性¹の故に政治参加から遠ざかっていると指摘する。すなわち、男性たちに要求される一家の稼ぎ手としての家族扶養責任は、すべての男性が背負わなければならないある種倫理的責任であり、その責任から逃れられる特殊な立場にでもいなければ、経済的、時間的に大変な負担を強いられる——つまり、一家の稼ぎ手の役割遂行ができなくなる——政治活動に参加することは難しい。そのような意味で男性性は必ずしも男性たちの市民権を促してきたとはいえず、むしろ大きな妨げになってきたと主張する。

ルブランは、以上の議論を展開するために二つ対照的なケースを考察する。新潟県の「タケノ町」と東京の「シラカワ区」²という一般市民にとって身近な地方政治を選び³、権力の中間管理者（power's middle managers）の二人の男性に注目した。タケノ町は、いわゆる90年代の革新自治体として住民投

票運動のモデルになった地域で、一般市民が自民党中心の旧体制を改めるため、無党派の連帯を形成し政治活動を起こした町である。この町で予定されていた原発建設を止めるために住民投票運動を率い、地方政治に新しい人材を送り込んだ草の根民主主義者の「パパ氏」に注目した。著者はパパ氏と仲間たちの政治活動を支える核心的な規範を男性「稼ぎ主」(the breadwinner) という倫理に見出す。パパ氏は、タケノ町の原発建設会社や推進派による腐敗政治をあらため、住民たちが自ら原発建設について選択する機会を与えるよう住民投票運動を行っていた。彼自身は親から引き継いだ酒屋を営む勤勉な稼ぎ主であり、そのため自ら進んで政治家になることは考えられない。しかし、新しい住民運動のリーダーとして住民投票を実現させ、さらに町の政策に投票の結果を忠実に反映させるため、町議会選挙に候補者を出してきたのだ。

著者はタケノ町のパパ氏宅に滞在し、パパ氏のグループによる選挙戦略、候補者選択、選挙活動、そして左派政党との会合などにも同席するなど、2ヶ月半にわたり参与観察を行った。描写に近い詳細な彼女の記録は、町のために「正しいことをする」という動機に支えられるパパ氏のグループが、彼らのような男性稼ぎ主の責任を負う男の仲間たちの立候補を断念し、若い母親など女性候補者を立てて当選させる過程を追っている。ジェンダー規範が強い地方においてこそ、男性稼得規範は強く働き、男性市民の政治参加を現実的に妨げている。その一方で、ゴミ、健康、環境、福祉など日常生活に密着した主題を取り上げるためには、女性候補者がより投票者にアピールできる事例はしばしば観察されることである。

90年代は、タケノ町のように革新自治体が注目を集めたことにより特徴づけられるが、他方で地方政治における自民党支配も依然として強力であった。著者はそのようなパズルを解くために、もうひとつのケースとして、一度も自民党支配が揺らいだことのない東京のシラカワ区を研究対象に加えた。ここでは、長らく自民党の区議員を務めた父親を継いで区議選に初出馬する若い男性、タカダ氏に注目する。タカダ氏は地域に奉仕する頼もしい若者として政治家の父の後を継ぐ「継承者」(the inheritor) の倫理を持つ。彼は、自己犠牲という実家の伝統を受け継ぎ、自分の意思を主張せずに政治家の家業に精出す親孝行の継承者である。誠実で親孝行な継承者というアイデンティティは、地域住民にとって政治経験のない若い男性を住民の代表として受け入れる理由になるが、同時に、一度も「まともな」仕事に就いたことのない「お坊ちゃん」のタカダ氏に男性稼ぎ主規範を免除する理由にもなる。実際に、大半の日本の男性とは異なり資産家の恵まれた環境で育ったタカダ氏は、一家の稼ぎ主という義務を負わないかわりに、政治家の継承者としての義務に精一杯頑張る姿を見せることで、稼ぎ主である男性たちと、男としての苦労やハードワーキングの倫理を共有するのである。

しかし、タカダ氏の持つこのような倫理観は、自民党内の男性中心で極めて序列的な内部秩序を無批判で受けとめることにもつながり、自民党式支配構造を内面化し継続させるメカニズムとしても機能する。タカダ氏の選挙活動の記録は、タカダ氏自ら語るように、政治世界で構築された「やくざ」に似た男性同士の秩序が、男の価値やアイデンティティを共有しない女性たちの政治参加に大きな障害になろうことを物語っている。ルブランは、「男同士」で共有される男性性に基づいたこのような認識様式を、タカダ氏の言葉を借りて、「腹芸政治」(“gut” politics) と呼ぶ。「男同士」の間では、あえて言葉で物事を説明せずとも互いの共有認識にもとづき互いの行動を理解する「阿吽の呼吸」が要求される。つまり、腹芸の要は言わぬことにあり、腹芸ができず言葉で表してしまう者は女かあほうにしかならない。したがって、腹芸 (the art of the gut) を行使する能力は、真の男を判断するひとつの基準になり、

男性がコントロールする権力にアクセスできるリソースになる。それゆえ、腹芸政治の能力は、男性中心な社会で男性として正しいことをしたい人にとってもその目的を実現させる最善の資源になるわけである。そうであれば、腹芸政治の能力は、保守派のみならず、革新派にも重要な資源になるだろう。ルブランは、タカダ氏のほか、ババ氏のケースでも、重要な妥協を引き出すために腹芸能力がしばしば使われるという。結局腹芸政治は、男同士の沈黙や理解として現れ、男性の政治的力を強硬に守る機能を果たしているのだ。ルブランの描くこのような政治世界では、女性議員は男性稼ぎ主役割に対し同情しないばかりか、腹芸のメッセージも読めないため、政治の周辺的な存在となってしまうことが浮き彫りにされる。

男性性をめぐって著者が強調しているもうひとつの論点は、政治と男性性の関係は道徳的側面を持ち、それゆえ彼らの行動を制限する機能も果たしている点である。男性性は「誰が政治において道徳的な人なのか」、「道徳的な人の行動とは何か」、つまり「正しい行いをする」ということと深い関係があるという。本書の研究対象の二人の男性は、政治的志向も政治活動を始めた背景も異なるものの、誠実な男として「正しいことをすべき」という倫理観に動機つけられている点で共通している。ババ氏にも、タカダ氏にも、政治は「正しいことを」(a good man) 実践する場としての意味をもつ。タカダ氏にとって政治家に重要なのは、義理が多く人情に熱い人間関係を作り、そのような規範を共有する強い責任感を持った男性たちによって、現在の日本社会の問題を解決することである。そのためには、自分に期待される義務を果たすべきなのであり、それが個人的な願望と異なる道であっても感受しなければならぬのだ。

以上のように本書でルブランは、だった二人の男性を考察することで日本の地方政治における男性性の働きを何より明快に解明することに成功している。男性性は男性の政治参加にとって資源にもなるが、多くの男性市民にとってはむしろ障害になる点や、男性性の倫理的な側面がどのように政治活動を形づくっているのかなど、地方政治の実相を一層深く理解するための理論的地平を広げてくれた。それは、制度分析や統計では表しきれないエスノグラフィという手法の持つ力でもある。すなわち、研究対象の人物の家族と同居しながら日常生活の隅まで密着し観察したことで、外国人研究者という距離感を克服し、深い考察が可能になったと考えられる。このような手法は、主流の政治学領域ではほとんど見られない研究方法であり、著者自身も政治学者の批判に備え本書の研究方法論についてかなり紙幅を割いているが、私見では、政治学領域においても、微細なニュアンスを捉えるこのような研究手法がより採用される必要があるだろう。ルブランの研究はまさにそのような必要性をさらに確信させる労作である。

(しん・きよん／お茶の水女子大学ジェンダー研究センター准教授)

注

- 1 本書では「ヘゲモニック男性性」という用語は使用されていないが、概念的にはロバート・コンネルのいう「ヘゲモニック男性性」に近いので、ここではコンネルの概念に依拠して論じる。
- 2 本書では研究対象者の氏名と場所を仮名にしているため、本稿でもそれに従い、カタカナ表記をする。
- 3 本書の出版年度は2010年だが、大部分の内容は著者が90年代後半に日本で行ったフィールドワークに依拠している。